

婦人戦線一年 婦人思想史

一 婦人戦線の発刊とその歴史的責任

婦人戦線の発刊を見ましたのは、昨昭和五年三月でありました。発刊に際しまして、三つのスローガン「強権否定、男性清算、女性新生」を可決し、爾来これを以て、われわれの運動の根拠としてきたのであります。

われわれのこうした運動に対して、あるものは言いました。「単なる性別的の団体と意識とに成り立つものである」と。そこでわれわれは昂然と、頭を上げて答えました。「然り」と。(一月号「われらの婦人運動」参照)

性別的の団体と意識とに立つことを、さも罪悪かのごとく考えていることは、今日の婦人思想および運動(ブルジョア婦人、プロレタリア婦人を通じて)の上における、マンネリズムであります。われわれはまず第一に、このマンネリズムを排し、われわれ「自身」の信ずる所に従って、行動したのであります。

われわれの運動は、日本における、および世界における、新婦人思想の発芽と、その成

育とを意味するものであります。われわれの思想は、形に現われている限りにおいては、いまだ幼稚であります。しかしながら、われわれの鉄のごとき自負と、いかなる批難、いかなる妨害に対するも、何等痛痒を感じないわれわれの勇氣ある態度とは、前途の勝利を物語るものでなくて何でしょう。われわれは確信を以て断言します。然り、断言します。

「光はわれわれから」と。

見よ、眇たる雑誌婦人戦線に拠る一小婦人団体の中よりして、かつて産業革命時代に花と咲いたブルジョア婦人思想に對抗し、しかしてそれを克服するところの、新婦人思想が始めて樹立されるのであります。われわれはそれを以て、われわれの歴史的責任であると感じているのです。

ブルジョア婦人思想は、十八世紀から十九世紀後半にかけて完成しました。たとえばソビエトロシアの結婚制度および婦人のための各種施設などは、ことごとく右のブルジョア婦人思想にもとづいています。レーニン政府は、特にエレン・ケイ女史、およびシャアロット・ギルマン女史の思想を、研究したといわれていますが、この両者は、いうまでもなく、ブルジョア婦人思想の代表者であります。

しかるにプロレタリア婦人は、まだ何等の新思想をも創生していない。右のブルジョア婦人思想に対し、それそのものを、批判克服すべく、彼女等は力量をも、努力をも欠いている。

だが、時代の進展と共に、必然に新しき思想は、彼女等ないしわれわれの間に、芽生え

二十八内

てくるのであります。それはもはや力量、努力等の問題を超越、宿命的の圧力となって、われわれの内部を揺りうごかす。われわれは今や、エレン・ケイ、ギルマン等の婦人思想に対し、恋愛論には恋愛論を以て、母性論には母性論を以て、教育論には教育論を以て、完膚なきまでに批判克服すべく、立ち上がっている。(くり返しているが、レーニン政府の母性保護、結婚、私生児等に関する諸制度は、エレン・ケイの属するヨーロッパ女性主義にもとづいているし、保育の社会化の施設等はギルマンの属するアメリカ女権主義の主張である。故にそれら両者を克服することこそは、一切を克服することである。だが、こうした事業は、いまだ世界のどこにも生まれていない。実に日本におけるわれわれの婦人戦線を以て最初とする)

かくてわれわれは、いかなる時代の新興者もがもつところの、一種強烈な自由性と、多端にして無組織、無体系的思想の噴出、懷疑、模索、破綻、矛盾、衝突等を敢てしつつも文字通り「わがまま」極まる言論を発表してきたのであります。けだし、「わがまま」こそは、思想および生活の新生時代にあつて、唯一の基礎となるべきものであることを、われわれは知っているのであります。

さて、日本におきまして、かくのごとき婦人の知的運動を生じました理由は、いろいろあるでありましょうが、その一つとしては、日本の社会的事情(婦人運動との関係における)を指摘しなければなりませんまい。

日本における婦人運動は、婦人運動の抬頭と、ほとんど同時であつた無産者運動の抬頭のために、外面的にも、内面的にも、混乱のあと著しいものがあります。西洋にあつては前代の婦人運動が婦人の教育、職業、参政権等の問題、即ち人権の問題を解決したあとを、無産婦人が受けて、進展するという事になつてゐる。が、日本ではどうかという、大正九年の新婦人協会の運動が、治安警察法第五条の一部の修正に成功しただけで、早くも婦人運動は分裂して、その先覚的、指導的分子は、無産者運動に没入することを以て、婦人運動の唯一の正しき道であるとしたのである。当時山川菊栄氏はいつた。「代議政治運動のごときは、我我無産婦人にとっては、問題外である」と。けれども、その状態も長くはなかつた。直ちに「方向転換」となり、彼女達はいつた。「代議政治運動は現前の事実だ。我々無産婦人はそれを利用しなければならぬ」と。昨日は問題外であつたものが、今日は大いに問題であるのである。かくて、かつての無産者運動は、それ自身の運動であつたので、無産婦人のみを必要としたが、政治的進展に基づくいゝゆる全面的運動は、いまや全国的婦人大衆を必要としている。即ち全体的な意味における「婦人」を必要とするのであるから、無産階級運動（主として労働組合運動）における従来の男女無差別的スローガンは、ここに特殊の婦人意識を利用すべく書きかえられねばならない。すべて政治主義は利用主義であり、それは必然に特殊の差別的利益を挑発する。

右のようなことが、日本にあつては、急激に行われた。さなきだに婦人の言論（先覚的の分子などといつても）は、無権威、無定見の暴露以外の何ものでもなく、まことに見

苦しく右往左往したのであります。だがこの状態は、婦人層の敏感的部分を刺激しました。そしてそこに極めて反省的、自覚的の現象を生じました。かつ政治主義の婦人利用意識は一層その現象を、逆に燃え上がらせたのです。「何ものにも利用されない、婦人自身の立場からの、婦人自身の思索——」「政治主義によつて製造もしくは組織されている多くの婦人意識への深き疑いと否定——」「そして最も正しき婦人意識の探究——」こうしたことが始まり、その矛盾は、期せずして西洋のブルジョア婦人意識（政治主義の一種のかいらいとしての）の批判にまでも及んだのであります。その敏感的の分子が、即ちわれわれの婦人戦線に拠つて立つたのであります。

しかしながら、われわれのこうした知的運動は、単に日本における特殊の事情にもとづいてゐるというよりは、より一層、世界の現実的の各種事情が、それを必然ならしめてゐるのであります。遅かれ早かれ、旧ブルジョア婦人思想を克服すべき、新たな新婦人思想が、われわれ婦人の間から芽生えるであろうことは、世界のおよび歴史的の必然なのであります。

幾千年の間の人為的社会は、今やその断末魔たる資本主義社会において、恋愛玩弄、産卵抹殺、母性無視、強迫教育を、究極的に暴露しています。これに対して、われわれ婦人が、根本的に自覚して、従来の人為的社会にむかつて、ふんぜんとして手套を投げつけるであろうことは、極めて必然のことなのであります。しかして、婦人のこの立ち上がりは、社会の経済的および文化的の一大転換に伴うものであります。今や資本家とその営利のため

の生産は、民衆とその生存のための生産に代わらねばならぬ。即ち営利という一つの人為的欲望を中心とする生産の形態は、生産という自然的な本能を中心とする生産の形態に置きかえられる。かくて従来の不純な製造文化——強権とか官利等のために製造された——は崩壊し、自然に即する純粹な創造文化がこれに代わる。即ち人為から自然へ——これが新時代の抬頭のあらゆる意味における中軸となるものであり、この意味において、新婦人思想も方向づけられるのであります。ブルジョア婦人思想は「自由」ということをいった。恋愛の自由、結婚の自由等。——それは多くの人為的自由を意味していた。新婦人思想は「自然」ということをいう。恋愛の自然、結合（結婚ではない）の自然等。——その他出産、育児、教育等においても、この自然ということが、新婦人思想においては、中心問題となるのであります。こういつてくると、われわれの新婦人思想の輪郭は、漠然とながらも、もはや幾分かつかってきます。しかしながら、再びくりかえしていいますが、これらの思想は、まだ世界のどこにも、形となつて現われていない。即ち独りわれわれの婦人戦線あるのみであります。われわれの責任の重くかつ大なるゆえんであります。

二 婦人戦線一年の婦人思想史を鳥瞰すれば

わたくしはいま、机の上に十二冊の婦人戦線をのせて、ふかき喜びをもつて眺めています。第一号は創刊宣言号であります。次は家庭否定号、戦闘小説号、フルマル男をうつ号、性の処理号、女流糺弾号、無政府恋愛号、都会否定号、無政府道徳号、無政府自伝号、我

等の婦人運動号、性の経済号——と都合十二冊において、われわれはかなり幼稚な、突飛的な、独りよがりな言論を敢てしてきました。しかしながら、われわれのこうした状態の中からこそ、最も自然にして、純粹創造的の新思想が現われてくるのであります。また、期せずして、それが一つの自然的体系すらも、形づくるようになってあります。

いま、それらの十二冊を鳥瞰的に観察しますと、最初の間、われわれはわれわれの婦人思想を、極めて素朴的に提出しています。が、順次に、社会的方法的に、社会的論理的に、社会的倫理的に社会的経済的に、というように、社会というもののとの関係において、考究を深めてきている。

創刊宣言号——「婦人戦線に立つ」においては、極めて初步的な二つの問題が提出されています。これは二つとも、政治主義的の婦人思想に対する抗議でありまして、一つは婦人の特殊の事実をことさら私事と見ることの不当を論じている。これはアメリカ女権主義者およびロシアボルシェヴィキが、婦人の社会的地位は、いわゆる公事に關与することの多少によつてのみ評価されるということ、極めて正しいことかのようについている。がもし、それを正しいとするならば、婦人は到底、男子の下位にあらねばならぬということまた、かくのごとき評価は、強権主義すなわち支配者の便宜主義からきているもので、従つてそれを正しいとする婦人思想は支配者のかいらいとしての婦人思想にしか過ぎないということを指摘したのであります。他の一つは、母性本能を立場とする抗議であります。「社会は出産を打算において迎え、保育を変態化し、さらに長ずれば教育によつてゆがめ

る」と言い、即ち支配者の功利主義のために、いかに種族の自然が踏みにじられているかということが論じてある。これもまたアメリカ女権主義者およびロシアボルシェヴィキの人々のもつエセ婦人思想に対する抗議であります。殊に保育の社会化を彼等は社会の必然的進化過程にもとづく正しき婦人「自由」思想であると考えているが、この現象を生殖の「自然」という立場から考えると、この現象は従来および現在の変態社会における変態的現象でしかないというのである。「社会が変態の状態から蘇った場合になつては、あらゆる全てのことが、常態に復帰する。即ち「子供は母の手で」ということこそは、考えて見るまでもなく常態の一つである。そしてその場合、社会は育児を母性の私事であるとはせず、母性をその選手とする」——（それに反して、育児の社会化なる思想は、母性ならざる婦人、職業的保母を育児の選手とする。これは支配者の便宜主義からいえば、極めて経済的、能率的であるが、生殖の自然からいえば、極めて不当であり、不合理である）——といったようなことを論じている。

この二つの問題——「婦人の解放」（地位の向上）に対する従来の見解、ひいて生産者本位説および労働者全取権説に対する婦人の抗議と、生殖（恋愛、妊娠、出産、育児、教育等すべて）の自然に対する婦人の主張とは、ひとくちにいつて、われわれの新婦人思想の根底をなすものであるが、それがここでは、極めて単的に提出されているのみであります。

しかしながら、この提出にもとづいて、意識無意識の間に、われわれの研究は進められ

てきたのであります。第二号における「家庭否定」の提唱は、右の二つの問題のうち、第一の——即ち「婦人の社会的地位」に対する徹底的自覚と、第二の——即ち「生殖の自然」に対するそれとを、併せ含んでいる提唱でありまして、新婦人思想として、最も重要な意味をもつものであります。

既に家庭を否定した意識の上に立つわれわれは、家庭と性生活とを、自ら別個のものとして考えなければならぬ。だが現在の政治的経済的制度のもとにあつては、家庭なるものは、多かれ少かれ、われわれの性生活に君臨しているところの、「事実」なのであります。即ち第五号「性の処理」号において、「性をいかに生くべきか」という方法的問題に突き当たつたのであります。ここでわれわれは、性の処理を性欲の処理とのみ解している従来もしくは現在の男子的方法を排し、飽くまでも女性の立場から、生殖の自由（自然）を主張しているのであります。これはまたわれわれによつて始めて叫ばれたものであります。

かくてわれわれは今や方法的問題から更に進んで「しからば性とは何か」という問題を論理的に研究しなければならなくなつた。第七号「無政府恋愛」号においては、「性の優生的自然律およびそれが人類の進化過程にあつて何を意味するか、即ち性は何のために存在するかというようなことを考究し、更に進んで、第八号「都会否定」号においては、性生活と深き関係を有する「美」の問題を、同じく論理的追求しているのであります。

かくのごとくにして、性の核心にまで到達したわれわれは、ここにおいて一転し、われ

われの立場を社会的論理的の方向から観察すべく努力しました。第九号「無政府道德」号がそれでありす。この号においては、われわれはいわゆる人為的道德とわれわれの自然的道德との関係を論じました。われわれ女性は、いかなる意味においても、自然の代表者である。自然は無道德的であつてしかも道德的である。かくてわれわれは、生存道德と生殖道德との関係を、漠然とはあるが、暗示したのであります。

われわれの思想的の運動は、右のごとくにして、一年を経過しました。今やわれわれはようやく衝動的の提唱の域を超えました。それは一年の最後の期間において、われわれがもつた特集「我等の婦人運動」号および「性の経済」号によつて、明らかに証拠だてられている。即ちわれわれは、今やわれわれがかつて提唱してきたあらゆる問題を、社会的経済的——すなわち極めて実生活的見地において、再吟味しようとして努力している。この努力はまだ実を結ぶには遠い。加うるに未発見の研究題目は次から次と、われわれの視野に出現してくる。あたかもわれわれの遠い祖先が、初めて宇宙の事物を、驚異の眼で見つめた時のような、あまりにも豊饒な、圧倒的な新発見と、新思索との洪水であるのであります。

三 婦人戦線一年の婦人思想史を個々の見れば

婦人戦線の過去一年がもつた特異な主張のうち、最も著しいもの二、三をあげると、いわく「恋愛私説の否定」、いわく「家庭の否定」、いわく「男女の性の相異に関する主張」、いわく「人為的優生運動の否定から自然的優生運動（恋愛）への自覚へ」、いわく

三十四

「人類の進化過程における性生活の意義」、いわく「美人美の問題」、いわく「道德と生殖」、いわく「嫉妬心の問題を中心とする西洋無政府主義者とわれわれとの論争」等々であります。いまそれを、ごく概略的に紹介してみましよう。

恋愛私説の否定——このことについては、わたしは多くをいうまい。何となれば、婦人戦線にあつてあまりにもしばしば出てくる問題であるからです。この説は、現在マルキストの間にあつて、あたかも最も新しい革命的の性思想かのように、言ひはやされている。それにもかかわらず、この説は決してマルキストのものではなく、従来の強権的、搾取的の社会における、共通の性思想である。

封建時代の武士——現在のブルジョア政治家、軍人、実業家に至るまでも、「色恋は私事であつて、国家の大事業の前にはいかに卑しむべき一事であるか」という考えをもっている。

かくの如き考えは何故に生れたか。また、私事に対する公事——即ち「私事を卑め、公事を尚ぶ」ことは、これまた強権的、搾取的の社会における特有な思想であるが、これは何を意味するものであるか。といったようなことへの答を、われわれはしばしば試みてきたのであります。

真に民衆の立場からいえば、公事とか私事とかいうような差別は、あり得ないのであります。例えば、もし恋愛が私事ならば、食欲も私事であります。しかるに、民衆にとつて

は、これらの私事こそ、その生活の中心であります。いかに国家の大事業が高尚なものであればとて、パンの道がふさがれ、生殖の自然が踏みこじられている——つまり私事的生活の悲惨を、そのままにしておくことが出来まいやうか。否、真に自覚した民衆は、むしろ私事的生活をこそ、最も重要なものであると、声を大きくして主張するに至るであらう。

従来の公事私事思想は、支配者の偽善的の搾取意識にもとづくものであります。即ち支配者の権力と富とを支持するためには、民衆は自己の生活——つまり私事的生活を犠牲にしなければなりません。その場合支配者は、民衆の不平をおさえるために、支配者への奉仕は、これを公事と称して価値高きものと思ひ込ませ、民衆自身の生活は、これを私事と称して自ら卑しむように仕向けたのであります。

恋愛私事説に対する婦人の徹底的自覚は、遂にかくのごとき結果となつて現われました。即ち公事私事に関する支配者の偽善は、今や白日のもとに暴露されたのであります。しかもこの暴露は、婦人を以てしてのみ可能なものであります。なぜならば、「男子は恋愛問題に対して無責任である。彼等は性行為を排泄的にのみ見る身軽な立場にある。ところが婦人にとっては、恋愛は直ちに妊娠となり、出産となるところの、はなはだ重大な意味をもつものだ。恋愛問題に対する男子の考えと、婦人的の考えとは、この点を境として食いちがうのである。即ち男子専制の社会が、恋愛問題を私事として軽視する理由の一つは、右のような男子の「性」からもきている」(第七号「無政府恋愛を描く」)——即ち、今

日にあつても一般の男子は、性行為は私事であるという説に対して、何の疑いもなく同意する。それは男子の「性」の然らしめるところであります。そして、「この男子の性を、抜かない支配者が利用するとき、公事私事の差別意識は、最も効果的に助長される」(右同)のであります。

恋愛私事説否定、および公事私事説の暴露——これは婦人戦線によつて、始めて試みられた、極めて重要な思想運動の一つであります。

家庭の否定——この問題も、婦人戦線によつて、始めて(歴史的にも、世界的にも)はつきりと提唱されたものであります。御承知の通り、ブルジョア婦人思想は、家庭の改善を目標としました。それに対してわれわれは、家庭の否定を目標とするものであります。

われわれが家庭の否定を提唱する所以は、さきにも申したように、第一には「婦人の社会的地位」に対する徹底自覚と、第二には「生殖の自然」——この二つの理由に基づくものであります。

「婦人の社会的地位」と「家庭」との関係については、われわれはこう思っている。いわく「婦人の社会的地位は、家庭なるものが存在し、あるいはまた何等かの形において家庭概念が残留する限り、必然に男子の下位であるべく決定づけられる」——故に「婦人の社会的地位、ひいて人類全体の社会的地位をして、徹底的に平均せしめたいと望むわれわれは、何よりもまず家庭の否定を提唱しなければならないのである」

「では」とわれわれはいう。「家庭とはそもそも何であるか」と。

一月号(第二巻第一号)「性生活の経済学的觀察」において、われわれは次のごとく解説した。いわく「家庭とは私有財産制社会における一つの経済単位である」。ところで「家庭以前にあつて、血族群、氏族群、ないしは原始共産村落が、社会の経済単位であつた時代と、家庭以後——即ち家庭が経済単位となつてからの時代とを比べてみると、その間に婦人の地位は、非常な相違がある」(右同)即ち前者にあつては婦人の地位は全く男子と平等であつたけれども、後者にあつては男子の下位におかれるようになった。なぜなら「共産的経済時代には、その生産または獲得された富は、直ちにその共産体の共有物であるから、女性はその利用するのに、何んの不自由も、制限も感じない。しかるに家庭が経済単位となつた時代においては、各経済単位はそれぞれ私有すべき富の量を、出来るだけ社会から分取らなければならない。この分取りの任に当るものが、即ちその経済単位の主体であるが、それは普通男性である。何んとなれば、平均して男性は、女性よりも富を分取る能力、腕力、知力において優れている上に、女性の出産、育児のために、ますますそういった方面の能力を減殺される必然性をもっているからである」(右同)故に家庭時代において、女性の地位が男性の下位にある所以である。

換言すれば、共産制時代にあつては、各生活体は素朴の血族愛(もしくは自然的の集団本能)を基礎とする境遇におかれるので、ことさら各人の地位を評価する基準というものは無い。すべてのものは平等である。これに反して私有制の時代にあつては、各生活体

二十一内

(家庭)は、経済意識を基礎とする。即ちここでは経済意識が、各人の地位を評価する基準となるが故に、経済的の優者は最高地位におかれるし、劣者は最低地位におかれる。この場合婦人は宿命的に(生理的に)、男性に比して劣者たるをまぬがれぬ。これ私有制時代、家庭制時代にあつて、婦人の地位の劣等である所以である。

以上のことをわかりやすくいうならば、家庭は私有制の単位であり、それは徹頭徹尾、経済意識を基準として構成されるものである故に家庭における各人の地位は、経済意識を基準として評価される。

近代の社会主義における「生産者本位」説、および「労働全収権」説等のごときも、明らかに私有制、家庭制における基礎的意識を踏襲したものに他ならない。

否、われわれはこういおうと思う。近代の社会主義なるものは、私有制廃止、家庭制消滅等の言論をあえてするかのごとくであるけれども、その実、何等かの形における私有制の残留、および何等かの形における家庭制の残留の基礎の上に立つものでしかない。例えばいわゆる財産の社会化、家庭の社会化といったようなもので、それは私有制および家庭制の延長でしかないから、その基礎をなす意識は変らない。

われわれはこれまで「婦人が家庭で働けば、家庭は婦人を高く遇する」というごまかしを真に受けてきた。最近にあつては「婦人が社会の生産に参加すれば婦人の地位は向上する」というこれまたごまかしを真に受けている。

だが、元来婦人は、地位の向上など望むものではなく、地位の廃止——即ち何ものによ

つても各人の地位なるものの評価され、決定されるといったことの全くない社会を望むものであることを、徹底的に自覚しなければならぬ。

しかるとき家庭（社会化された家庭も）なるものは、各人の地位を経済的の基準によつて評価、差別するところの、即ち「生産者本位」的、「労働全収権」的の意識を基礎とするところのものである。即ちわれわれ婦人（自らの、およびすべての人の地位に対して自覚したところの）にとつて、絶対に相容れないものである。われわれが「地位」という観点から、家庭の否定を叫ぶ所以である。

さて「家庭否定」の第二の理由——むしろ婦人にとつては、これこそ根本的であるところの理由は、さきに言つた通り「生殖の自然」にもとづくものである。

家庭は私有財産制社会における経済的単位であるが、「これを両性関係の側面からみるならば、家庭とはその経済単位の経済主体によつて統制される性生活を意味する」（一月号「性生活の経済学的觀察」）言いかえれば、主として男性によつて統制される性生活を意味する。従つてあらゆる場合男性の性欲本能が、女性の生殖本能を虐げる結果を生じ、それと共に、性生活の一切が経済的の基準によつて評価される結果をも生ずる。

男性の性欲本能が、女性の生殖本能を虐げるということについては、われわれはしばしばこれを問題にしてきた。第二の——性生活の一切が経済的の基準によつて評価されるということこそは、最も重要な問題である。ただし婦人戦線にあつては、この問題は、まだ具体的には研究されていない。が、第二号「家庭否定論」のなかで、「家財とは妻子およ

び家畜家具等を含む一切である」といつてある。即ち妻子は、家畜や家具とひとしく、経済的の価値に換算される。

妻とは何か。私有された一生殖器であり、私有された家事労働者である。富家にあつては、家事労働は他の労働者がこれに当たり、妻は一生殖器としての労働に服する。一生殖器としての労働というのは、つまり売淫である。売淫は男子の性欲本能が女子の生殖本能を虐げる状態における性生活である。これが社会化すると、売淫的思想——即ちフランス、ロシア等の社会主義革命が伴う「性の自由」思想等のごとく、「性欲の自由」を意味するものでしかない性思想の出現となる。つまり男子の性思想の勝利は家庭制および家庭制の延長せる社会における必然の結果である。

さらに母となれば、古語に「母は父の子を保育するための雇人である」といつているように、母はここでは決して「自然を代表する存在」ではなく、家庭における「金で買われた」雇人、即ち労働者でしかない。故に家庭にあつては、母胎と育児との自然的関係は認められず、それは全く引き離して考えられている。即ち育児は雇人の仕事である。そこで富家では乳母などというものが使用されるが、乳母であらうと、母であらうと、同じ雇人であるから、変りはない。また家庭制の延長せる社会にあつても、根本觀念には少しの変りもない。即ち保母とよぶ「育児のための雇人」が、社会的に使役される。かくの如く、家庭制および家庭制の延長せる社会にあつては、「母胎と育児」との関係における「生殖の自然」は、徹底的に踏みにじられるのである。

次に家庭制の社会は、「出産を打算で迎える」（創刊号「婦人戦線に立つ」）——即ち子供というものを、ここでは経済的の価値として計算する。第一には「財産の番人として」——即ち財産相続者として。第二には「財産そのもの」として——即ち「万の倉より子が宝」とか、「十人の雇人より一人の子」といったような言葉がこれを物語っている。かくの如くすべてを経済的の基準によつて評価する。故に、資本主義社会となつて、機械が人によつて生産（富）の単位となるや、子供というものが経済的に無価値となり、その結果、産児抹殺の世界的流行となる。（第二号「貞操観の展開」に「ブルジョア時代の家庭は、子供を生むことを目的としない」とあり、第七号「無政府恋愛を描く」には「避妊および墮胎は、もはやおおいがたい事実なのだから、法律上に取り入れることは、資本主義各国とも、もはや目前の問題となつてきている。つまり「子を生まぬ」結婚の承認こそは、資本主義国が自らの結婚制を公然と完成する最後の段階である」……）

かくの如く、家庭制は、経済的の基準によつてすべての事物を評価する。それは「生殖の自然」を踏みにじる。即ち、われわれの「家庭否定」が、この立場から生まれたものであること、生まれざるを得なかつたものであることは、以上ではほ明らかになつたと思う。要するに、われわれの家庭否定論は、非常に多くの内容をもち、創意（意見）をもつてゐる。またわれわれはこれをあらゆる方面から研究しようと試みた。その研究には、かなり注目するに足るものもあつた。一例をあげると、松本正枝氏は「家庭否定」を境として「男性の社会主義」と女性の社会主義」とが対立する、ということを歴史的に証明し、進

三十二内

んでブルードン、マルクス両者の経済思想が、遂に「家庭肯定」を出ない所以を、経済学的に研究したのであります。

男女の性の相違に関する主張——この問題についても、われわれは全く新しい主張をした。ひとくちにえば「男子の性は性欲の解決をもつて万事終るが故に、その性思想も、その立場から生まれる。従来の革命は、必ず性の自由思想を伴つたけれども、それは常に性欲の自由を意味するものでしなかつた。即ち男子専制的革命であつたからだ。これに反して真に自覚した女子が革命に参加する場合には、その革命に伴う性思想は「生殖の自由」を意味するものである。だが、そういうように自覚した革命婦人は、われわれを除くはかは、まだ出現してないのである」（第五号「無政府主義と性の処理」、第五号「嫉妬心の問題」、第二巻第二号「わたしはこう思う」等参照）

その他、「人為的優生運動の否定から自然的優生運動（恋愛）への自覚へ」の問題については、第七号「恋愛と優生」参照。ここでは、「恋愛の自然」的発動に対して、優生的の信頼と根拠をおくわれわれの「生殖の自然」一元説が強調され、それに反して、かの優生学者等の優生学的運動が、いかに非科学的で、不正確、不成功であるかを暴露したのである。次に「人類の進化過程における性生活の意義」の問題については、第七号質疑応答欄参照、われわれはここに、性思想に発する宇宙觀的思想体系の一端に到達している。

いわく「性の現象は人類保存の形式による人類消滅への過程である」また「婦人美の問題」については、第八号「女性の都会否定」および「美人論」参照。ここでわれわれがいかに重要な仕事をしているかは、次の機会にくわしく書いて見たいと思う。「美とは何ぞや」という問に対して、われわれは女性の立場から、明確な解答を与えたのである。さらに「生殖と道徳」の問題については、第九号「母性と無政府道徳」「力の角逐か道徳か」参照。

西洋無政府主義者とわれわれとの「嫉妬心の問題」を中心とする論争——これは第五号「嫉妬心の問題」に端を発し、第二巻第二号研究欄において、彼等男子的の性思想およびその運動に対する女性の立場からの徹底的の論争となつたのであります。この論争は別項記載の如く、いよいよフランスを中心に燃えひろがりつつあります。われわれは今後引き続き、彼等をして自覚せむべく、努力するであります。彼等の性思想は、彼等無自覚な男子無政府主義者のみのものではなく、現在における一般的の、しかも最も革命的であるとする称せられる性思想を（もちろんマルクス主義者のそれをも含めて）代表するものであります。言いかえれば、この論争は、男子的の性欲本能に対する、女子的の生殖本能の対立にもとづくものであります。

婦人戦線一年の婦人思想史を関するためには、このほかに「結婚とは何ぞや」の問題とか、まだ挙げれば限りがありません。また、評論のみでなく、小説、詩等についても、大い

手本外

に論じられねばなりません。しかしながら概して言えば、婦人戦線の過去一年は、「婦人意識」もしくは「婦人戦線意識」の素描でありました。それはその性質上、主として評論によつて試みられました。かくてわれわれが今や出発せんとしつつある第二年においてこそ、評論においても、作品においても、いよいよ具体的なものとならねばなりません。評論においては、いよいよますます発意的に、はた科学的に、作品においては今年こそ「婦人意識」に立脚する婦人文学が、われわれの間から、堂々と出現しなければならぬのであります。